

後世に残したい校本

野原康宏編
李賀詩集校本
(全2冊セット)

森瀬 壽三



B5判 校本篇 161頁
索引篇 297頁
颯風の会発行／朋友書店発売
[本体 5000円 + 税]

李賀(字長吉 七九一―八一七)は、唐代の詩人のなかでも飛びぬけて異色の存在で、鬼才の語源として知られる。不安定であったが個性と自由が花開いた中唐という時代に、わずか二十七年という短い人生を駆け抜けた彼の詩篇は『楚辞』の後裔と目されたように、底なしの絶望と強烈な自己主張に彩られる。それゆえ以後の暗い時代において中国知識人の急進的な人々に読まれ続けた。近代における魯迅や詞人毛沢東も例外ではない。

李賀の作品は、縁者に恨みをかけて廃棄されたという伝説(唐張固『幽閑鼓吹』)も残るが、珍しくも二種の宋版が現存する。(括弧内は本書での略称)

- ① 李賀歌詩編四卷集外詩一卷(宣城本) 台北国家図書館蔵
- ② 李賀文集四卷(蜀本) 北京国家図書館蔵

いずれも影印本が出ている。前者は一九七一年に線装本で出版されたが現在では入手が比較的困難である。後者は複数の影印本が出ていて比較的容易に手に入る。評者は一九八六年に当時の北京図書館で後者を閲覧する機会を得た。

野原氏は前者を底本として定め、(許可を得て)その影印版に注記する形で後者蜀本および以下の諸本を校合する。

- ③ 歌詩編四卷(蒙古本) 四部叢刊影印本
- ④ 歌詩編四卷集外詩一卷(毛本) 汲古閣唐四名家集
- ⑤ 歌詩編四卷集外詩一卷(馮本) 静嘉堂文庫所蔵
- ⑥ 李長吉集一卷(朝鮮本) 国立公文書館蔵
- ⑦ 唐李長吉歌詩四卷外集一卷(巾箱本) 台北国家図書館蔵
- ⑧ 李長吉歌詩四卷(楊本) 劉須溪評点九種書之一
- ⑨ 唐李長吉歌詩四卷外集一卷(院本) 室町末近世初間鈔本

- ⑩ 唐李長吉歌詩四卷外集一卷（林本）林羅山等鈔本
 - ⑪ 又玄集三卷（又玄集）昌平坂學問所板本
 - ⑫ 才調集十卷（才調集）四部叢刊景宋寫本
 - ⑬ 文苑英華千卷（英華）中華書局影印宋刊配明刊本
 - ⑭ 文粹一百卷（文粹）四部叢刊影印元刊本
 - ⑮ 樂府詩集一百卷（樂府）文學古籍刊行社影印宋刊本
 - ⑯ 萬首唐人絕句一百一卷（絕句）文學古籍刊行社影印明嘉靖刊本
 - ⑰ 古文真寶前集三卷（真寶）通行本
 - ⑱ 唐音十五卷（唐音）湖北先生遺書影印明嘉靖刊本
 - ⑲ 唐詩品彙九十卷（品彙）上海古籍出版社影印萬曆刊本
 - ⑳ 詩淵六冊（詩淵）書目文獻出版社影印稿本
 - ㉑ 天厨禁燭（禁燭）中華書局影印明活字本
 - ㉒ 竹莊詩話（竹莊）中華書局排印本
 - ㉓ 詩林廣記（廣記）中華書局排印本
- ①～⑥は、本文のみの無注本で宋代の刊行もしくは元代までの翻刻である。ただし⑥は十五世紀末朝鮮の所謂「甲辰活字」で印刷された古活字本で、詩篇が分類され一卷仕立ての孤本である。古いテキストの翻刻であろう。⑦～⑩は、宋代呉正子の箋注・劉辰翁の評点が付いた『唐李長吉歌詩集』の刊本と鈔本であり、文政元年（二八一八年）の「官板李賀詩集」

は⑩に基づく和刻本である。⑪～⑯は、宋・明以前の刊行もしくは成立になる総集で李賀の作品を掲載するもの。⑰～⑳

は、宋代に数多い詩話の中で李賀の作品を掲載するものである。

以上のように、底本との異同調査の対象として扱われるのは二十二種のテキストである。つまり宋・元のテキストを対象を限定し明代以降のテキストを排除している。その理由は「明版は字句の独自性もさりながら詩篇の編次さえ大幅に改変されるなど信憑性に欠け」（凡例）るからである。この判断は正しく、校本を作る際の指針となるだろう。余談ながら、逆にそうした明人の「杜撰さ」にこそ、古典熱と自我意識の高揚という明代特有の文学情況を考える視点が存在するよう

に思えるがいかがであろうか。

ところで、校本という思い出すのは周祖謨氏の校勘記による「沢存堂『広韻』校本」を修業時代に手にした時の驚きである。宋本の韻書の各葉に複数個所の誤字や錯脱が指摘されていた。のち一九九三年、台湾芸文印書館刊行のその書に周先生の識語を頂き今も座右にある。現在見る最も古い刊本（しかも辞書）にあれだけのエラーが存在するのだから、我々が唐詩をどれだけウルテキストから離れて読んでいるのか、と戸惑ったものである。その最たるものは、揚州の人々の清

朝への怨念が然らしめたとしか考えられぬ『全唐詩』の杜撰さであろう。

異同の例を二三挙げれば、「雁門太守行」の第二句「甲光向日金鱗開」の「日」は、底本・蜀本兩宋本とも「月」に作る。第五句に「夜紫」という語があり、これに引きずられたのだろうか、第一句の「黑雲」の語と齟齬をきたす。「李憑箏篋引」第六句「芙蓉露泣香蘭笑」の「露泣」は、蜀本・蒙古本・呉注本等多く「泣露」に作るが、句造りと第五句との対偶性からして底本が正しい。これらはいずれもすでに荒井健著『李賀』(中国詩人選集)で校訂選択されている例ではある。しかし、校本はいわば基礎・土台であり、注釈や解釈は、その上に載る建築物である。したがって、本書が明代曾益の『李賀詩解』や清朝王琦の『李長吉歌詩彙解』など明以降の注釈書の本文を校勘の対象としなかったのは至極当然なことである。

この校本が世に出るまでには想像以上の年月が必要だった。編者野原氏は現在私塾を経営して後進の指導にあたっておられるが、氏の二十年にわたるサイト「喫煙日記」のブログを拝見していると、この校本は氏が神戸大学の院生だった頃から師と仰いでいる荒井健京都大学教授(現名誉教授)に勧められて作成を思い立ったようである。校本作成には、まず底本をどれにするか、そして異同調査の対象をどこまでと

するか、手元の資料とコピーできる資料を揃え、コピーできない資料は所蔵先に向いて該当箇所を確認する。そして、ひとつひとつの文字の評価、字体の違いをどこまで採るか。さらにそれらのデータをどう記録し整理してゆくか。テキストの氏素性の確認からして余程の知識と鑑識力、それに他分野の専門家の協力も必要である。野原氏の二十年を越える絶えざる努力を支え続けアドバイスを惜しまなかったのが荒井教授だった。卑見では、監修者として名を加えるべきではないかとさえ思う。本書の「凡例」を一読しての感想である。

長い年月をかけて野原氏の息の長い作業が続いたが、一昨年ようやく出版の目途がつき、学術振興会に出版助成の申請が出された。出版社の指示どおり申請されたようだが、不運にも不採用となった。普通ならここで長年の努力も水の泡となるはずだった。決して大きな篇幅の書物ではないが、すべてを出版社に委ねての自費出版は個人の資力ではないが、実現できるものでない。ところが、野原氏は早い時期からマックintoshコンピュータの使い手で、職業柄最新のマックを使って製版することをお願いした。テフは一九七〇年代に数学者クヌース氏が数式を美しく印刷するために公開OSのユニックス(Unix)で開発した組版ソフトである。現在では

開発が進み、他のOSそして多くの言語で組版が可能になっている。縦書きも可能となり、野原氏は底本の写真版に行数を入れ、脚注の形で諸本の異同を記す体裁をとることができた。当初、JIS漢字コード第一、第三水準ではどうにもならなかった字形（フォント）も、ユニコード（Unicode）が開発されて世界中で使われた数万字の漢字表記が可能になったので、「発音意味不詳」の文字までも使えることとなり、自費出版がなんとか可能となったのである。いわば校本の副産物としての「索引篇」は、異文からも検索できる李賀詩集のコンコードダンスとして研究に資する書となった。コンピュータ技術の発展と、野原氏の才能と努力がこの校本となって陽の目を見たことを喜ぶたい。ただ、先に述べたように校本はあくまでも研究の基礎・土台であって、その上に建築するの

は未来の人々である。短時間で成果を挙げることが要求される昨今、しっかりと基礎を築くことにひとつの手本を示したこの校本を一冊でも多く後世に残したいものである。なお若干の訂正が上記サイトにアップされた。

（もりせ・としぞう 関西大学名誉教授）

好文出版

琉球語史研究

石崎博志 著

琉球語を示すハンダ、漢語、欧文文献をもとに琉球語の歴史的変遷を論じた。第一部は、基礎資料を個別に考察、資料の位置づけを明確にした。さらに第二部で第一部の考証に立脚して15世紀から現在までの琉球語の変遷を明らかにしつつ、近年新たに紹介されたシャル・アグノエルの調査資料をもとに、南北に広がる沖縄本島各地の言語の変遷について論じ、危機に瀕しているといわれる琉球語が現在の状況に至った要因を探る。

A5判／三八頁 本体六〇〇〇円＋税

文化交渉と言語接触研究・資料叢刊4 語言自適集の研究

内田慶市 他編著

中国語史研究および中国語教育史研究に極めて重要な資料でありながら、これまでなかなか手にすることのできなかったトーマス・ウエードの『語言自適集』の初版とその試行本である「問答篇」「登瀛篇」を完全影印し、併せて、関係論文と各版の序文の漢訳、全語彙索引を収録した。

B5判／一〇〇七頁 他編著

〒162-0041 東京都新宿区
早稲田鶴巻町540 林ビル3F
Tel.03-5273-2739 Fax.03-5273-2740
<http://www.kohbun.co.jp/>